

## 第 131 話〈閉山〉の要約と参考資料

### 第 131 話〈閉山〉の要約

国内鉾山が相次ぎ閉鎖に追い込まれていた 1962 年、土呂久鉾山の経営が中島鉾山会社から中興鉾山会社に移ると、「和合会」の佐藤勝会長らはすかさず「亜ヒ酸製造中止」を要求。弱体化していた土呂久鉾山は閉山となり、亜ヒ酸製造は開始から 42 年で幕を下ろしました。

### 第 131 話〈閉山〉の参考資料

#### 1 3 1 - 1 「惣見」の系図

惣見の墓より

角治	文久 3 (1863) 年 2 月 4 日 49 歳 * 日之影町史「内藤家文書」P154 に角治の名前あり
栄八	角治の長男 大正 4 (1915) 年 3 月 13 日 70 歳
熊彦	栄八の弟 大正 12 年 9 月 24 日 76 歳 * 「新屋」のコユキの父鶴平の兄千代太とともにクマを撃った。
為三郎	栄八の長男 昭和 22 年 12 月 12 日 79 歳
清八	為三郎の長男 昭和 46 年 10 月 2 日 78 歳
勝	清八の長男 昭和 49 年 2 月 1 日 58 歳

佐藤チトセさんの話 (1982 年 12 月 24 日)

角治が「中」から分家して「惣見」をつくった。もとは、倉→中→惣見ではないか。この家は「角じいやん」から始まって、嫁女は山裏から来たげな。

「中」の家はここより古いげな。「町」もここより早うできたらしい。ここができたときには、惣見には何軒も家があったらしい。

この家 (1992 年に取り壊して高鍋町に移築) は為三郎が 5 歳のときに建った。

黒木正喜の親爺の「米やん」(米松) が石垣を築 (つ) いて回る人で、川向うの小屋のあるところに家を建てて住んでいた。

川向うの田は 50 年前に 3 反 5 畝開いたが、米やんが石を切って、石垣を築いた。背戸の田は、もともと屋敷を建てるために開いておったのに、屋敷を下に持ってきたために上を田にした。

#### 1 3 1 - 2 「惣見」がひき受けた和合会役員

和合会役員

佐藤栄八

明治44年2月21日 副会長

\*昭和14年旧正月24日 本会50周年記念事業に関する件 本会の為、功績あり  
し人々に記念品を差しあぐることとなれり 以上5名

佐藤為三郎

大正2年2月25日～大正8年2月23日 取締役

大正11年2月20日～大正14年2月 会長

佐藤清八

昭和2年2月～昭和3年2月14日 取締役

昭和3年2月15日～昭和8年5月24日 幹事

昭和25年5月25日～昭和11年旧正月23日 副会長

昭和11年旧正月24日～昭和13年2月22日 会長

昭和13年2月23日～昭和16年2月18日 副会長

昭和16年2月19日～昭和19年2月24日 会計

昭和19年2月25日～昭和22年2月13日 幹事

昭和28年旧正月24日～昭和31年旧正月23日 評議員

佐藤勝

昭和34年3月3日～昭和37年2月27日 評議員

昭和37年2月28日～昭和40年2月24日 会長

\*昭和40年2月25日の総会で「和合会と公民館を一本化する」ことが決定。会長に小笠原徳一氏が選出された。昭和41年2月14日が第1回公民館総会で、佐藤富喜夫氏が公民館長になる。

### 131-3 佐藤勝

佐藤勝の墓碑（佐藤幸利起案）より

昭和49年2月1日 幸利ノ父 勝 行年60歳

故佐藤勝は祖父清八、チトセとの間8男2女の長男として生れ、尋常高等小学校卒業後、熊本松田農場研修生として学び、帰宅後上永ノ内佐藤武男氏二女佐藤トネと結ばれ、結婚生活30年の短い間1男4女の父となり、只ひたすらに子孫生長を念じつつ、部落の先導者として数多くの業績を修めつつ、佐藤寿町長時代に観光土呂久に夢を託し3反3畝の自田に養魚場の計画立るも、昭和46年11月斉藤教諭鉦害告発共に用水水害説あり、はかなくも中断、2年後49年2月1日認定を受けるべく脳波検査実施の朝静かに永眠。翌50年12月27日認定患者5人と住友金属鉦山を相手取り宮崎地裁延岡支部に損害賠償請求の訴訟を起す。現在審理中の糸口を残してこの世を去る。

#### 1 3 1 - 4 日本の鉱業政策の歴史と変遷（金属資源レポート 89）より

##### 貿易自由化と国内金属鉱業の改善

戦後の日本の産業は、厳重な為替管理による輸入制限をもとに、外国との競争から保護されつつ発展してきた。昭和 29～30 年にかけてほぼ戦前の工業水準に達したといわれる……（略）戦後の復興期を過ぎ、経済の目ざましい発展に転じた日本に対し、欧米の先進諸国は貿易、為替の自由化を強く求めてきた。すなわち 1959 年（昭和 34 年）10 月、東京で開催されたガット（GATT—関税と貿易に関する一般協定）輸入制限協議会で、欧米先進国は日本に対し、貿易および為替の自由化を強く迫った。一方、日本としても国際経済社会の一員としての地位を強め、さらに経済の拡大を図るには、貿易の振興が必要であり、その前提としての貿易、為替の自由化は不可欠なものとなってきた。

そこで、1960 年（昭和 35 年）1 月、政府は「貿易・為替自由化促進閣僚会議」を設置、検討を続け、昭和 35 年 6 月には 3 年後の自由化率を 80%とする貿易・為替自由化計画大綱を決定し、昭和 36 年 7 月にはこれを半年繰り上げかつ自由化率を 90%に引き上げる決定を行った。（略）貿易の自由化は、国際競争力に問題のあった我が国非鉄金属鉱業にとっては、その存立にかかわる重大事であった。（略）

日本の金属鉱業は、鉱石の品位が低くその採掘条件が劣悪であること等の条件がその国際競争力を弱めている主要な原因となっているので、探鉱を急速に進めて優良鉱物資源を確保することが鉱山の体質、国際競争力の強化の最大の課題と考えられた。しかし、自由化に伴う金属鉱産物の価格の低落により、金属鉱業界の財務内容は悪化し、探鉱を強力に推進するという体質改善策の遂行が資金面から大きく制約されることが予想され、そのまま放置すれば金属鉱業は深刻な打撃を受けるとみられた。（略）

昭和 36 年にはいって、すでに問題となっていた海外共同開発機運が、鉱山物の自由化対策を契機として急速に高まってきた。（略）このような背景の下に 1962 年（昭和 37 年）9 月 10 日、海外経済協力基金と鉱業会社 22 社の共同出資により「海外鉱物資源開発（株）」が設立され、海外活動のための共同体性が確立するに至った。

#### 1 3 1 - 5 新鉱脈探しのボーリング

「土呂久鉱をボーリング / 県、経営たてなおし」＝日向日新聞記事（1960 年 2 月 16 日）

県は西臼杵郡高千穂町岩戸にある中島鉱山所属土呂久鉱山を立て直すため、このほど鉱床探査ボーリングを始めた。

同鉱山は銅、鉛、アエンなどの鉱石を出し、月産 300 トン、1 千万円程度が掘られていたが、さる 33 年 7 月、下部の坑道の全部を水没し、その後生産は 10 分の 1 に激減している。このため経営権も中島鉱山から住友金属系の鯛生鉱山に移ったが、現在新鉱脈を求めて鉱山立て直し計画が進められているもの。ボーリングは水没した下部の見すて、上部

と近くの黒葛原地区を重点に行なわれており、3月末までには一段落つく予定。

131-6 住友金属鉱山、鯛生鉱業、中島鉱山会社、中興鉱山会社の人事面のつながり  
及川浩氏

昭和31年6月1日 大口鉱業株式会社の代表取締役就任

昭和33年11月15日 大口鉱業から商号を鯛生鉱業に改め。及川は代表取締役

昭和41年8月30日 鯛生鉱業取締役辞任

\*昭和31年5月31日～38年5月31日 住友金属鉱山取締役

\*昭和33年10月24日～41年9月1日死亡まで中島鉱山会社代表取締役

\*大口鉱業の本店 東京都港区芝新橋5丁目12番地

鯛生鉱業の本店 福岡市天神1丁目12番14号

住友金属鉱山の本店 東京都港区芝新橋5丁目11番3号

鈴木仙氏

昭和23年3月3日～33年10月24日 中島鉱山会社代表取締役

昭和33年10月24日～41年12月20日 中島鉱山会社取締役

昭和42年2月24日～45年8月31日 鯛生鉱業取締役

永見龍輔氏

昭和23年3月3日～33年9月30日 中島鉱山会社取締役

\*昭和32年5月当時 新木浦鉱業所長

\*昭和33年10月 土呂久鉱業所長

昭和37年10月25日～昭和37年12月4日 中興鉱山会社社長

131-7 中興鉱山会社

鈴木仙インタビュー(夕刊デイリー1964年11月2日)

鈴木 土呂久鉱山を閉鎖するというとき、最後まで残った従業員一同が永見所長を中心に“資本金500万円で中興鉱山株式会社を設立、地域民を中心とした外録鉱山開発の構想”が従業員側から出たが、鉱山開発については表面からだけではみられない複雑性もあるため、この案は動き出して3か月で消えたものでした。これがホントの最後でしたらうね。当時の中島鉱業の社長は及川ひろしさんでした。永見さんは現在高血圧で病床にありますが、従業員の数人からは消息も来ているようで……。

### 131-8 中興鉦山と和合会の契約更改に関する新聞記事

「煙害補償更改を要求 / 地元民、中興鉦山に」＝宮崎日日新聞（1962年10月31日）

西臼杵郡高千穂町、中島鉦業土呂久鉦業所（本社、大分県南海部郡宇目村木浦、及川浩社長）は経営不振による体質改善のため、さる25日新会社中興鉦山（本社、大分県南海部郡木浦、永見龍輔社長、資本金500万円）を設立したが、30日“土呂久和合会”では同鉦山にたいして煙害補償の更改もしくはヒ（砒）鉦の製造中止のあっせん方を高千穂町に申し入れた。同町では来月12日、3者で話し合うことにしたが、煙害をめぐる地区民と会社側との交渉はかなり難航するのではないかとみられる。

同鉦山は32年から中島鉦業が経営、ヒ鉦と粗銅の生産をしていたが、35年、鉦脈が出水したため採掘できなくなり、現在ではほとんど操業を中止していた。しかしこんど新会社を設立、月産ヒ鉦8トン、粗銅50トン为目标に事業を開始することにした。

和合会は土呂久地区61世帯の部落会だが、旧中島鉦業時代からヒ鉦を焼くために出る煙害の補償を受けていた。新会社設立で煙害の契約が切れるとして同補償の更改か、それができなければヒ鉦の生産中止を申し入れようというもので高千穂町にあっせん方を依頼した。

高千穂町では佐藤町長と和合会代表、佐藤勝さんら6人が話し合ったが、来月12日に会社側の立ち合いで話し合いをすることにした。

佐藤町長の話 まだ煙害問題については具体的によく聞いていないのではっきりしたことはいえない。3者の話し合いのうえでじゅうぶん両者が納得いくようにしたい。

永見社長の話 以前から部落に支払っていた金は煙害にたいする補償ではなく、地区民への謝礼の意味で出していたものだ。地区民が煙害の補償を要求するというが、煙害については化学的な根拠がなにもない。こんどの要求も謝礼金の問題なら考慮する。

「“アヒサン製造中止を” / 地元が新会社に要望」＝朝日新聞宮崎版記事（1962年10月31日）

西臼杵郡高千穂町土呂久の土呂久和合会代表者佐藤勝氏らは30日、町役場に佐藤町長をたずね、土呂久鉦業所の会社が変わったためアヒサンを焼くときの煙害補償の契約はどうなるのか、できればアヒサン製造を中止してほしいとの要望を、会社側に仲介してもらいたいと申込んだ。

町当局は11月12日会社幹部、地元代表者、町当局の3者合同打合せ会を開く予定にしている。

現在までの土呂久鉦業所は、中島鉦山鉦業会社に所属していたが、新たに中興鉦山株式会社土呂久鉦業所になった。中島鉦山鉦業（及川浩社長）は本社大分県南海部郡宇目村木浦にあり、新設された中興鉦山（永見龍輔社長）も本社は宇目村木浦で、資本金200万円で去る25日設立届出をしており、永見社長は中島鉦山時代の土呂久鉦業所長だった。新しい土呂久鉦業所はヒ鉦8トン、素銅50トンを毎月生産する計画になっている。

佐藤町長の話 中島鉦山と契約した煙害補償の更改契約を、中興鉦山とすることはわかるが、アヒサンの生産中止はとても望めないだろう。なんとか円満に話合いたい。

永見社長の話 中興鉦山は、事業的には中島の系列会社になるが、資金面では別個です。煙害補償というが、科学的に立証されておらず、煙害補償を出しているとは考えていない。地元の協力に対するお礼の意味で出していたもので、その意味でなら話合ってもよい。

「町長一任で解決へ / 中興鉦山（高千穂町）の煙害補償」＝宮崎日日新聞（1962年11月13日）

西臼杵郡高千穂町土呂久の中興鉦山と地元民の間の煙害補償問題は、12日午後2時から同町天の岩戸支所で協議した結果、佐藤同町長一任で話し合いが付き、近く中興鉦山が町に具体案を示し、契約書を取りかわす見通しがついた。

話し合いには地元代表、佐藤勝さんら10人、会社側は永見社長、鈴木重役ら4人と町長が出席、町民の要求していた①煙害補償②ヒ（砒）鉦の製造中止—にたいして会社側は「煙害は科学的に実証できないので、お礼の意味でのみ補償を考慮する。ヒ鉦は会社の事業目的だからやめるわけにはいかない」と回答があった。

地元民はあくまでも煙害補償を強く要求したが、佐藤町長の説得などもあり、会社側も「亜硫酸ガスの放出にはできるだけ方法を考える。補償もお礼の意味で経済的な事情の許すかぎり善処する」として今後の交渉は町長に一任することになったもの。

「“謝礼の契約する” / 高千穂町中興鉦山 / 煙害の補償要求」＝朝日新聞宮崎版（1962年11月14日）

西臼杵郡高千穂町土呂久に新発足した中興鉦山土呂久鉦業所（社長永見龍輔氏）に地元民が去る10月下旬アヒサン生産の煙害補償の更改契約をするか生産中止するかを要求を出していたが、12日午後から高千穂町役場岩戸支所で部落代表10余人、佐藤高千穂町長、永見中興社長ほか重役が出席、3者会談を開いた。地元の要求に対し、会社側は①煙害補償の承認は出来ないが、地元協力に対する謝礼の契約はする②アヒサン生産施設の拡張はしない、もしするとなれば部落の了解を得た上ですと回答。結局謝礼金の額と今後の交渉は地元側は佐藤町長に一任、会社側は近く重役会を開き謝礼額を決めて佐藤町長に通知することになった。